

## 祖国の土を踏ませたい

『嗚呼 満蒙開拓団』にも登場

徐士蘭が3月来日

支援の集會に あなたもぜひ！

奥村正雄

『徐士蘭に祖国の土を踏ませる会』という集まり（千葉市）がある。徐士蘭とは、現在、中国・方正県に暮らす残留孤児で、長年、厚労省に孤児の認定を申請しながら、孤児である物証がないために認められず、帰国できないでいる女性（70歳）だ。

目元に愁いを帯びた、品のある顔立ちをご記憶のある方も少なくないはずである。羽田澄子監督の記録映画『嗚呼 満蒙開拓団』で娘たちとともに自分の生い立ちを涙ながらに訴えているシーンが印象的だったからである。彼女が初めて私たちの前に姿を現したのは4年前（2006年）の6月である。その機縁となったのは次のような、ある偶然の出会いからだ。

### ■ 駅前カメラ店で

恒例となった「方正・交流と歴史検証の旅」（2006）に参加された稲川清さん（千葉市稲毛区在住）が方正へ出発直前、近くのカメラ店に立ち寄った。そこに中国語を話している夫婦がいた。国際線のパイロットとしてスペイン暮らしも長く、気さくな人柄の彼は夫婦に声をかけた。

「中国の方ですか？ 私は明日、中国の方正というところへ行くんですよ」

相手が日本語に未熟だったり、吉林省や遼寧省からの帰国者で、「ホウマサ」という日本語の発音に戸惑ったりしたら稲川さんの、この話しかけは、その場限りで終わっていたかもしれない。

ところがこれを聞いた帰国者の妻は間髪を入れず、こう応じたのだ。

「ほんと？ 私たちも方正からの帰国者なのよ」



彼女の名は瀨瀨代美子さん（中国名・焦玉賢）長野県から一家で旧満州へ渡った時、彼女はまだ4歳だったから、今から25年前。1985年、方正県から家族で帰国した時は日本語が全く話せなかった。しかしその後、懸命に勉強して、ほとんど不自由なく日本語を話せるようになっていた。そのために稲川さんの日本語がすぐ通じたのだった。瀨瀨さんにとっても、いや徐士蘭を知る私たちにとっても、これは運命的な出会いとなった。瀨瀨さんは稲川さんに徐士蘭のことを話し、方正へ着いたらぜひ彼女に会って話を聞いてくれるよう頼んだ。

### ■生母は着物の切れ端に

2006年6月22日、私たちが方正の宿「鑫禧大酒店」に一步、足を踏み入れた時、ロビーのソファにかけて待っていた徐士蘭と三女たちがさっと立ち上がって寄ってきた。話は部屋で中国側の通訳を交えて詳しく聞いた。

「私は長い間、私が日本人の孤児であるということを知りませんでした。1945年8月に私を拾ったという張文学さんからそのいきさつを、初めて詳しく聞いたのは、ずっと後のことです」

敗戦の年の8月、近くの小学校にたくさん日本の女性が来ているという話が伝わって、20何歳かでもまだ独身だった張さんは、のち徐士蘭の養父になった男に誘われて小学校へ行ったそうだ。しかし勧められた日本女性は彼より年齢が離れすぎて結婚の相手とは考えられなかった。帰ろうとするとき一人の日本女性が駆け寄ってきた。丸顔で背はあまり高くない。「どうかこの子をもらってください」と哀願し、自分が着ていた和服を破いて何か字を書き、それを張文学さんの懐にねじ込むと、拝みながら去って行ったという。

こうして張文学さんに預けられた幼い徐士蘭は、まだ独身だった張文学の手から養父（徐汝庚）へ渡った。優しくったという徐家の養母が1年後に亡くなったあと、徐士蘭の受難が始まった。2歳下の義妹と3人暮らしとなったが、養父はことごとくに彼女につらく当たった。8、9歳の頃、牛の世話、薪ひろい、飯炊き…。学校へ通う義妹の送り迎えをさせながら、養父は徐士蘭を学校に通わせなかった。

「あるとき養父は妹を連れて食堂へ餃子を食べに行ったが、私を連れて行かない。私は家で犬のえさのトウモロコシめしだけで、漬物もない。一度、食堂のおばさんが私にも一緒に来たら、と言ってくれたけど私は行かなかった。行っても家に帰ってきてから折檻を受けることがわかっていたから。またあるとき、盆踊りがあって私は行きたくなかったんだけど、義妹がどうしても私に連れてって、というので一緒に行った。その時も養父が私を探し出して牛の鞭でさんざんたたかれ、早く家に帰って飯を作れって怒られました。それを見て隣の王さんが、いくらお前の子じゃないといっても、それはひどすぎるじゃないか！と言ってくれました」

しかし、養父の虐待はその後もやまなかった。

## ■高粱と子牛1頭の嫁入り話

徐士蘭が13歳の時である。

「養父は70斤の高粱と2歳の子牛と引き換えに、私よりずっと年上で耳が聞こえない男に嫁として売ろうとしたの。私はどうしても嫌だと言った。すると養父は草刈鎌で私の脳天をたたき割ろうとしたの。それでも私が承知しないのを見て、とうとう村役場の人と近所の人が仲裁に入ってくれ、やっとこの結婚話は解消されたわ」

その後も彼女に対する養父の虐待は続いたが、彼女が16歳の時、人生の転機が訪れた。紹介する人があって方正県武装部の通信員だった丛志文と結婚した。この結婚によって徐士蘭ははじめて養父の虐待から逃れることができ、周囲の話から、次第に自分が日本人であり、残留孤児であることを確信するようになった。

だが残留孤児として帰国を申請するには、周囲の証言だけでは話が進まなかった。実の親が彼女を中国人に預けた時に渡したという、自分の着物のきれっぱしに書いた彼女の名前…その小さな「物証」さえ1つあれば、と彼女は裏の畑を掘り返したりして探しに探した。だが多くの証言が示すように、日本の孤児を育てた養父母たちは、1966年に始まった文化大革命で、残留孤児を育てたなどの情報が伝わってひどい目に会うことを恐れ、少しでも証拠となる品はひとつ残らず焼却するなどして身の安全をはかったのだった。徐士蘭の養父もまた例外ではなかった。



前列左端が奥村、徐士蘭さんの左が孫娘、右が三女。後列左が吉川雄作、右が飯田栄助。

こうして徐士蘭が厚労省に提出した孤児として認定してほしいという申請は証拠不十分で受理されなかった。厚労省によっていったん却下された孤児認定の申請は、その後新しい物的証拠でも提出されない限り、覆ることはない。

しかし一昨年の晩秋、「あるできごと」が起こった。北京の大使館で話題の映画『嗚呼 満蒙開拓団』が上映され、関係者が観賞した。これを観たある高官がふと「彼女（徐士蘭）は可哀そうだ。一時帰国でひとめ、祖国を見せてやれないものだろうか」と漏らした、と伝えられる。この情報は千里を走った。孤児の支援者を通じて徐士蘭本人の耳に届いたのである。

誤解のないように、ここで徐士蘭の現在の家庭環境（本誌別掲の吉川雄作氏「方正再訪」参照）と、そういう事情によって彼女は現在、特に日本への永住帰国を望んではいないことを付記しておかなければならない。ただ、彼女の気持ちの中で誰よりも強烈に切望しているのは「私は日本人」という公式の認証を得たいということだ。日本人である唯一の物証になるはずだった、実母が着ていた着物をその場で切って書いてくれたという現物が永遠に喪失してしまった以上、ほかに何を根拠に日本政府に訴えればいいのか。

## ■腕に残る疤痕のあと

私たちが今、彼女のためにひとつ望みをつないでいるのは、彼女の右腕に残る「疤痕の痕（あと）」だ。これは厚労省が中国で行った検分では日本人とみなすための証拠にはならなかったようだ。しかし私たちが見たところ一見して彼女と同じく、明らかに中国人のそれとは違う疤痕あと、によって日本人と認定され、日本に永住帰国している帰国者がいることを知った。

私は秋の一日、この女性を訪ねた。千葉県浦安市で一人暮らしのRさんの自宅である。彼女は中国・黒竜江省牡丹江市穆稜県で育った。1989年、厚労省に孤児の認定を申請、半年後に身元不明のまま残留孤児と認定され、1996年6月に永住帰国した。彼女が孤児と認定された根拠は二つ。1つは彼女が自分の姓は知らないが名「××子」を覚えていたこと。もう一つは腕に遺された疤痕跡だった。

徐士蘭の腕に遺された疤痕跡とRさんのそれとの違いは、一見、判然としない。一方をシロとし、一方をクロとする根拠は何か。この説明を厚労省に改めて求めることができるのかどうか。また、すでに制度としてはとっくになくなっている疤痕について、戦前の旧満州時代に日本側が行った疤痕と、中国が行ったそれとの違いについて、詳しい研究者などがいて、これを判別してもらうことが可能かどうか。この件に関する情報があったら、ぜひ文末の連絡先まで知らせていただきたい。

徐士蘭が求めてやまない日本人としてのアイデンティティを、今度の来日で見つけてあげることができるかどうか。また、たとえそれが叶わなかったとしても、夢に描いてきた祖国の土を踏みしめた上、彼女を励まし、慰労し、支え続ける同胞がたくさんいることを彼女に実感させてあげることができたら、どんなに喜ぶだろう…。



### ■ 3月来日を申請

参考までに、いま彼女に準備してもらっている来日ビザの申請書は年明け早々に黒竜江省方正県の外事弁公室に提出され、問題がなければ書類が瀋陽の日本領事館に回る。そこで問題がなければビザが発給される、ということになる。そしてこの申請に記入した来日の日程（10日間）は次の通りである。

3月23日（水） ハルピン→新潟→千葉へ  
24日（木） 千葉で帰国者たちと会う  
25日（金） 東京で見学と買い物  
26日（土） 千葉市で励ます会  
27日（日） 西伊豆一泊旅行  
28日（月） フリー  
29日（火） 東京で励ます会  
30日（水） 買い物  
31日（木） 千葉の帰国者とお別れ会  
4月 1日（金） 東京→新潟→ハルピンへ

なおこのプランをスムーズに進めるために次のことをお願いいたします。

- \*カンパをお寄せください。ご連絡をいただければ振込用紙をお送り申し上げます。
- \*日程の変更や「励ます会」の詳細など、プリント（会報）をご希望の方は連絡先をお知らせください。でき次第、適宜、お送りいたします。
- \*西伊豆の温泉で富士を見ながら一泊、に同行ご希望の方はお知らせください。
- \*その他 お気づきのことをどうぞお聞かせください。

#### 徐士蘭に祖国の土を踏ませる会

連絡先

〒262-0033

千葉市花見川区幕張本郷7-7-3

奥村正雄

電話 043-272-9995

FAX 043-272-0214

メール [k.beijing6918@mx5.ttcn.ne.jp](mailto:k.beijing6918@mx5.ttcn.ne.jp)